

「中国の貧困対策の経過」 川崎高志(本研究所理事、創価大学助教授)

中国では近代において、政府による貧困対策はほとんど行われておらず、天災などに翻弄されていた。中華人民共和国建国当初も総人口の9割を占める農民の6割が飢餓と貧困にあえぐ状態であった。

社会主義体制下で貧困対策などの農地改革が行われ、小作農から自作農に転換していった。毛沢東時代は政治主導で社会主義政策が実施され、トウ小平及び江沢民時代は経済主導で改革開放政策により農業の集団化が見直されていった。しかし経済発展を遂げていくなかで経済的格差が生まれ、環境破壊も激化していった。

貧困地域の特徴として、老(革命根拠地)、少(少数民族)、辺(省境)、山が挙げられる。政府投資資金が増えたことにより、貧困人口は78年には2億5千万人だったのに対し、99年には3400万人に減った。

国家による貧困対策は、80年代には貧困地区の土木・災害対策建設などが行われ、90年代には貧困状況のより厳しい地区・農民への対策が重点的にはかれた。

21世紀の中国の課題は残された西部地域の開発である。貧困対策から発展政策にどのように転換するのが重要である。